

『大学は歴史の思想で変わる：FD・評価・私学』

寺崎昌男 (2006) (東信堂)

大 門 正 幸

本書は、著者の手による21編の論考が収められた、論文集である。大学教育研究の第一人者である著者の寺崎氏は、本学の客員教授でもあり、21編の論考の中には本誌に掲載された3編が含まれている。¹⁾一見多岐にわたる問題を対象にしたように見えるそれぞれの論考を束ねているのは、表題にある「歴史の思想」、別の言い方をすれば、「歴史的な視点」である。

ここで言う「歴史の思想」とは、著者が関心を持つ問題を歴史的に探るという研究手法を意味するだけでなく、自校教育の創設や文書館の設立など、大学自身を持つべき思想の内容を表現したものである。

本書の構成は以下の通りである。

I FDと教職員そして自校教育

- 第1章 FD再考
- 第2章 三たびFDを考えるー日本的理解への批判的提言ー
- 第3章 アメリカの大学教員論を読むーFDへのヒントを求めてー
- 第4章 大学職員の役割、教員との関係、そしてプロフェッショナル化ー
- 第5章 自校教育という新しい実践ーその試みと意義を考えるー

II 教育評価・研究評価

- 第1章 日本の大学評価-批判的展望の試み-
- 第2章 大学基準協会の歴史とわが国における大学評価の特質
- 第3章 「教育への取り組み」を評価するということーどのようにすればそれは意味を持ちうるかー
- 第4章 教育評価という仕事への注文
- 第5章 教養教育の目標・内容の評価をどう考えるかー大学教育学会の課題研究からー
- 第6章 大学における学術評価と教育評価

III 大学院と学位

- 第1章 日本の大学院とその教育ー現状・問題点・将来
- 第2章 日本の学位制度ー小史の試みー

IV 文書館

- 第1章 大学アーカイブズーその意義と新しい役割ー
- 第2章 大学アーカイブズ私見ー九州大学大学史料室に寄せてー
- 第3章 こういう日がやと来たー京都大学大学文書館の成長を祈ってー
- 第4章 沿革史編纂のスタート地点に立つ大学へー九州工業大学に寄せてー

V 存在としての私学、歴史としての私学

- 第1章 私立大学ー歴史が残した問題、今後の課題ー
- 第2章 戦前私学の位置と存在理由ー立教の中で考えるー
- 第3章 私学と官学ーライバル発生の起点からー
- 第4章 私立大学の歴史的特性
- 第5章 建学理念の共有と付属校・系列校の在り方

第I部の5つの論考はいずれも(i) 大学教員の専門性と大学職員の責務に関する問題、(ii) FD・SDの問題、(iii) 大学自体の教育責任をどう果たすかという問題のいずれか、あるいは二つ以上について検討したものである。著者はこれらの問題を「緊急な検討を必要とする問題」として位置づけている (p.xi) が、全く同感である。流石に現在ではFDと聞いて「ファカルティ・ディベロップメント」を想起しない大学関係者は少なくなったように思うが、それでも「FD=教育技術の開発」としか考えていない大学関係者に接し、驚かされる場合も少なくない。第I部の論考で提示されている、問題意識が1人でも多くの大学関係者に共有されることを強く望みたい。

第II部の6編の論考はいずれも評価に関わる問題を扱っている。表題は「教育評価・研究評価」とあるが、各論考における考察の中心は教育評価である。

提出書類、特に短期目標や中期目標、その達成度といった教育評価に関わる書類の激増に悲鳴をあげている教員は少なくない。第II部の論考に目を通すことで、書類に忙殺される現状がどのような行政的・社会的背

景から生まれてきたものなのか、またその意義あるいは問題点は何かといった点について理解を深めることが可能になる。

なお、大学基準協会について扱った第2章では文部省廃止論まで飛び交う戦後の混乱期に作られた協会の原点、その後の「死に体」となった時の様子などが描かれ、歴史読み物的な楽しみも味わえることを付記しておきたい。

第Ⅲ部の2編の論考は、今後確実に増加していく大学院について考察する場合の大きな助けとなるであろう。特に本書の紹介者にとっては、「学部が存在して始めて大学院が存在する」という「学部本体論」ともいべき発想が敗戦直後の大学院誕生時の負の遺産であるという指摘や（pp.229-230）すでに高度経済成長時代に始まっていた大学の大衆化に対して対策をとってこなかったツケが現在廻ってきているが大学院については同じ轍を踏んではいけない（p.233）、といった指摘は印象的であった。

第Ⅳ部には、東京大学百年史の編纂責任者であった筆者ならではの、文書館の必要性を訴えた4編の論考が収められている。文書館が歴史家、地域、大学のアイデンティの確認を通しての大学関係者全体など多方面に貢献することを力説し「私は、このさい文書館をつくっておくかどうかは、大学の浮沈にかかわってくると思います」（p.276）と説く著者の言葉は傾聴に値する。本学との関係で言えば、沿革史編纂事業を始めようとする大学への助言という視点で書かれた第4章が大変参考になるであろう。

第Ⅴ部の5編の論考はいずれも私立大学に関するものである。わが国の私立大学がどのような経緯で生まれ、特に国立大学と比してどのような特徴を持ち、ま

たどのような問題を抱えているのか、ミクロの視点（特に立教大学に焦点を当てた第2章）とマクロの視点の両面から考察されたそれぞれの論考は、私立大学の現在と今後を考える上で大変参考になる。第1章から第4章を通読すれば、「特色はあるが金はない」私学が財政的苦しさ故に独自性と自主性を失って行く過程、そして国立大学の法人化によって「(国公私学を問わず)大学一般の存在理由」が問われるようになった今、改めて独自性・自主性を取り戻すことが必要になった経緯が大変よく理解できるであろう。また付属校・系列校との関係の違いに基づいて私学を3つの類型に分類し、それぞれの類型の問題・課題を明らかにした第5章は付属校・系列校との関係について考える場合に大変有益な視点を提供してくれるであろう。

本書に目を通して常にも思い出していたのはイギリスの作家であるチェストン（1874-1939）の次の言葉である。

The disadvantage of men not knowing the past is that they do not know the present. History is a hill or high point of vantage, from which alone men see the town in which they live or the age in which they are living. (G.K. Chesterton (1874-1936), *All I Survey*, "On St. George Revivified" (1933))

歴史的視点で書かれた本書の論考は、現在の大学の立ち位置を正確に理解し、これから進むべき道を探る上で大変参考になる。大学に関わる全ての人に一読をお勧めしたい。

〔大学教育研究センター 副センター長〕
教授 人文学部 英語英米文化学科